

# 熊取町・京都大学原子炉実験所

## 大阪にある原発研究炉

大阪府南部の貝塚市と泉佐野市に挟まれるように位置し、約4万5千人が暮らす熊取町。南から東に和泉山脈が広がる風光明媚なこの町に、大阪で唯一の原子炉がたたずんでいる。京都大学原子炉実験所だ。4月に一般公開されると聞き、駆け付けた。(新聞部)

### 発電炉と同じ仕組み

正門前で受け付けを済ませ、目的地・原子炉棟に向かう。メイン通りには、約200mにわたって核並木が続く。近隣では核の名所となっているよう、「原子力のイメージアップを狙っているのだろっか」と思ってしまった。

原子炉棟に入るには、放射性物質の外部流出を防ぐため、靴にビニールカバーを付ける。チリやホコリも見逃さないといった徹底ぶりだ。ちなみに、原発事故では東日本を中心に放射性物質が降り注いだ。この国では、大量に流出すれば管理不要になる。



直径28m、高さ22mの原子炉建屋。手前右は矢部新聞部副部長、左は永田顧問

実験所は、1963年に核エネルギーの利用と放射線の研究・教育を目的に、全国の大学の共同利用研究所として発足した。当時は周辺住民の大きな反対運動が沸き起こっていたという。広大な敷地には、研究用原子炉や放射性廃棄物処理棟などの研究設備がある。福島第一原発事故後、年一回の一般公開日に多数の住民が実験所を訪れるようになった。

準備が整い、約10人がグループとなって研究者の後に続く。担当してくるのは、放射線医学を研究する医師だった。「専門分野以外は詳しく

の1程度。炉心部は「14型のフランウ管テレビカメラの大きさ」というのが、核燃料に中性子を当てる仕組み。冷却水の循環が途絶えても、核燃料を自然冷

## 老朽化、紀伊地震…不安尽きず

### 配管・器具入り乱れ

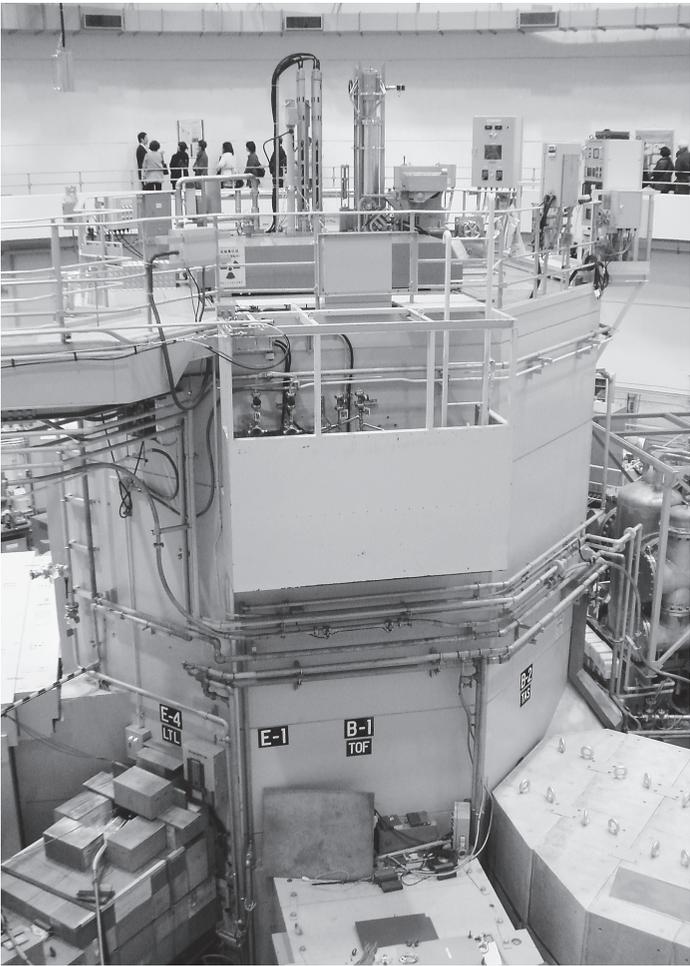
格納容器を上から眺めると、秩序なく配管や器具が入り乱れ、随所にさびが目についた。「汚い」「老朽」「混沌」などのネガティブな言葉が次々と思い浮かぶ。冷却水漏れが起これば、現場を特定するだけでも困難だろう。

原発事故の問題で数人の職員に話を聞いたが、研究炉と発電炉の違いを説明するばかり。研究者としての気骨ある意見が聞けるかと思ったが、期待外れだった。実験所には、原発に異を唱え続けた小出裕章助教や今中哲二助教らが所属しているが、彼らの批判的視点は所内では多数派ではないことが感じ取れた。ただ、原子炉の建築・設計の専門家は、「南海地震で予測される震度に対しては、耐震基準を満たしている」と見做されている。上層部は、津波の心配は全くなく、安全だ。施設の入り口では靴にビニールの下を履き、放射性物質が外部へ出ないように配慮

### 核サイクルの研究も

格納容器の隣には、医療用のベッドが設置されていた。案内してくれた医師の研究チーム「中性子捕捉療法」だ。「がん細胞だけを選択的に破壊する体によさしい治療法」と宣伝されているが、医師は「がん細胞と同時に正常細胞にも損傷を与えているのが実際のところだ」と打ち明けた。「お電話いただけると、耐震基準を満たしている」と見做されている。上層部は、津波の心配は全くなく、安全だ。施設の入り口では靴にビニールの下を履き、放射性物質が外部へ出ないように配慮

### おおざかウォッチング



来年で50歳を迎える京都大学原子炉実験所の研究炉

4月7日に矢部新聞部副部長、事務局員と共に、京都大学原子炉実験所を見学した。私が原子力に関心を持つようになったのは、遙か昔からのことだった。

小学生は「軍事オタクが多かった。世界列強の軍備競争に一喜一憂した。戦後になって原子爆弾の詳しい構造を知り、また、核開発の経緯を知った。理由はこんなことであ

## 炉心近くでの作業に驚き

### 新聞部・永田悦夫

されていた。

事務局長、事務局員と共に、京都大学原子炉実験所を見学した。私が原子力に関心を持つようになったのは、遙か昔からのことだった。

上層部は、津波の心配は全くなく、安全だ。施設の入り口では靴にビニールの下を履き、放射性物質が外部へ出ないように配慮

を歓迎する態度で、丁寧なもてなしを受けた。研究者は熱心に自分の仕事を説明し、ほかの状況には関心が薄いように見えた。

### 京大原子炉見学記 前

た。米国の核開発を主導したヴァネヴァ・ブッシュは、親子で大統領となった。

事務局長の車に乗せてもらって泉南の熊取町は結構遠く、大阪も広いと実感した。到着してまず感じたことは、小高い山の外から遠隔操作(マジック

ありがたくない情報までいただいた。屋外に出るには、放射能汚染の有無を特殊な機器で確認する。数値が高ければ除染しないと出られなくなるが、幸い原子炉棟に閉じ込められることはなかった。